

〔大東文化大学所蔵日本書跡解題〕(監修・古谷 稔)

(2) 右衛門切古今和歌集 伝寂蓮筆

島田昌広

- ① 制作年 鎌倉時代初期・一二〜一三世紀
- ② 材質・形状・員数 紙本墨書・掛幅装・一幅
- ③ 本紙寸法 縦二〇・六×横一四・〇センチ
- ④ 表具寸法 縦一四二・三×三七・二センチ
- ⑤ 表具仕立 三段表具

一文字・風帯 薄茶地・雷文

中廻し 茶地・花唐草文

天地 薄藍無地・絛綯

軸端 木軸

懸緒 平打紐(紺糸・白糸の織り交ぜ)

⑥ 付属品 二重箱

外箱 桐白木箱・平打紐

内箱 黒漆塗り箱

⑦ 所蔵番号 J241・1112668950

(大東文化大学図書館蔵・平成十六年受入)

伝寂蓮筆「右衛門切」は、『古今和歌集』の断簡である。『古筆学大成』第四巻には巻一五、一六を除くすべての巻にわたり残存している。仮名序は完全であり、もと粘葉装の冊子本である。筆者は後鳥羽上皇和歌所寄人の一人であり、『新古今和歌集』の撰者でもある寂蓮と伝えられているが、「一品経和歌懐紙」(京都国立博物館蔵)や「熊野懐紙」(陽明文庫蔵)などの真筆と比較すると異筆である。

「右衛門切」の名は、『古筆名葉集』(文化五年(二八〇八)刊)に、「右衛門切 中四半、四方墨界、哥二行書、古今集、木下右衛門ヨリ出ル」とあり、豊後国日出城主、木下右衛門大夫延俊(一五七七〜一六四二)の所蔵にちなむものといわれている。また延俊は、藤原伊行筆「葦手下絵和漢朗詠集」(京都国立博物館蔵)を旧蔵したことも知られている。「右衛門切」にはほかに、寸法、墨野を引く書式とも同一の「詞花和歌集」「千載和歌集」が伝えられる。もと冊子本で、筆者も同じく寂蓮と伝えられている。しかし、『古今和歌集』を書写した「右衛門切」と、『詞花和歌集』を書写した「右衛門切」は同筆といえず、さらに同じ「詞花和歌集」を書写した「右衛門切」でも全てが同筆かどうか、検討を要する。一面六行書き、七行書きや八行書きもあり、歌一首二行書きである。また「右衛門切」には一点のみ、雲紙に書かれたものもある。『古筆学大成』・『平安時代の書』(日本の美術No.一八〇)に登載されており、『古今和歌集』巻十五恋歌五、七四七・七四八(たいしらす 藤原なりひらの朝臣 一行のみ)を書写したもので、番号は『新編国歌大観』歌番号・以下同様。紙面の左端に藍の雲形が漉き出されたものを所用し、書式は他の「右衛門切」と同じ形式をとっている。

本断簡は、「右衛門切」の断簡であり、『古今和歌集』八八二・八八三の歌が墨野の枠内に書写されている。このような枠の野は、「元暦校本方葉集」「今城切」などにも引かれている。掛幅装の随所に傷みが見え、保存状況は良好といえない。また、本紙最後の行の左側余白に墨野を擦り消したような形跡が残っているが、これは表装する際に意図してなされたのであろう。本断簡は、『古筆学大成』に掲載されていない断簡である。

次に書風について述べる。線質はやや硬く、墨継ぎをした際に、肉厚に文字を書き始め、次第にシャープな細線を駆使しながら、太細の変化をつけているのが特徴である。渴筆はあまり使われておらず、リズムよく筆を運んでいる。行の上方はゆとりを見せてゆったりと書き、文字間隔はやや広めにとっているのに対し、行の下方は、文字は段々と小さく、文字を押し込めたように間隔を詰めて書いて

いる。このような肉厚な、筆を力強く展開させた書風は、平安朝の仮名とは趣を異にするものであり、和様漢字の影響とも受け止められ、鎌倉時代独特の風格を示すものではなからうか。

《釈文》

よみ人しらす

あまのかは雲のみをにてはやければ

ひかりと、めす月そなかる、

あかすしてつきのなかる、山もとは

あなたをもてそこひしかりける

これたかのみこのかりし

あしをたづねてはなれど
あしをたづねてはなれど
あしをたづねてはなれど
あしをたづねてはなれど
あしをたづねてはなれど